

ツンデレ属性と言語表現 —役割語的アプローチとケーススタディ— *1

富樫純一 (大東文化大学)

jtogashi@ic.daito.ac.jp

0. 問題の所在 —研究対象としてのツンデレ表現—

◆ツンデレというキャラクターの存在

「ツンデレ」と呼ばれる概念は、2002年後半にネット上のスラングとして登場し、おおむね2004～2005年を境として、一般層にも定着しつつある勢いで拡大している。昨今のサブカルチャー作品において、ツンデレキャラクターは必要不可欠な存在となっており、作品そのものに言及する場合においても、ツンデレの存在が意識されないことはないだろう。ツンデレな言動のキャラクターは、物語を構成する上での重要な要素となっている。

◆特徴的な表現

ツンデレの詳細な規定は次節以降で試みるが、一般的な (あるいはオタク系の間での) 認識として、ツンデレという属性が付与されているキャラクターは、以下のような特徴的な言葉づかいをするものであると位置付けられている。

- (1) ベ、別に、あんたのことなんか何とも思っていないんだからねっ！！
- (2) ぐ、偶然よ、偶然。たまたま帰り道が同じだけなんだから！
- (3) 勘違いしないでよね 別にあんたのためにやったわけじゃないんだから
(釘宮(2007) 読み札「か」)*2
- (4) 「そういえば今日のはあんたの誕生日だったわよね…昨日たまたま偶然…ほーんとうに偶然、頭の片隅のほうで思い出しちゃったから」
「しょうがないからプレゼントいきおいで間違っって買っちゃったんだけど、ほしいならあげるわよ！ と、とりあえず受け取りなさいよ！」
(釘宮(2008a) 君津妙子)

*1 本発表は、発表者のブログ「ネ言」(<http://d.hatena.ne.jp/negen>)において、「ツンデレ言語論」というタイトルでエントリーした一連の論考を土台としている。

*2 実例は出典を明記。出典のないものは全て作例である。

例えば、言いさしの「から」、発話頭のつかえ、終助詞「ね」「よ」等が共通の特徴として挙げられる。博士語やお嬢様言葉といった、典型的な役割語ほどではないにしろ、こういった言葉づかいをさせることで、特定の偏った人物像が想起できる。

このような「ツンデレ表現」は、ツンデレキャラクターを特徴付けるものとして用いられているといえるだろう。逆に、ツンデレ表現を目にすれば自ずとツンデレキャラクターが想起できる。役割語との類似性が、ツンデレ表現にも認められるのである^{*3*4}。

本発表では、役割語の観点に立ち、ツンデレ属性、およびそれと密接に結びつく言語表現の分析を試みることを目的とする。

◆本発表の主な構成

- (a) ツンデレの概念規定の試論
- (b) ツンデレ表現分析のケーススタディ

1. ツンデレとは何か ー概念規定ー

1.1. ツンツンとデレデレ ーツンデレの発生ー

先にも述べたように、ツンデレは、2002年後半にネットのスラングとして発生した比較的新しい概念である。まず、ツンデレという概念を説明した記述をいくつか見てみよう。

- (5) 1. 気が強いため、恥ずかしがっているところや照れを隠そうと、好意を寄せている相手を突き放すような態度（ツンツン）をとってしまう性格のこと。
- 2. 主人公に対して刺々しい態度を取っていたヒロインが、何かのきっかけでツンツンの中にも隠し切れない照れを見せる、あるいは反転して急速に好感度を上昇させていくストーリーおよびそのヒロインのこと。

いずれの意味でもそのギャップによるかわいさから萌え属性の一つに挙げられている。

（はてなキーワード - ツンデレとは（2008/10/15時点の記述））

*3 役割語とは、以下のように規定される。

(a) 「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢・性別・職業・階層・時代・容姿・風貌・性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」（金水(2003), p.205）

*4 もちろん、現実の日常生活でツンデレ表現が用いられることがほとんど無いことも、役割語との共通項といえる。

- (6) ツンデレは、「ツンツンデレデレ」の略でありキャラクターの形容語のひとつ。意味は、「普段はツンと澄ました態度を取るが、ある条件下では特定の人物に対しデレデレといちゃつく」、もしくは「好意を持った人物に対し、デレッとした態度を取らないように自らを律し、ツンとした態度で天邪鬼に接する」ような人物、またその性格・様子をさす。

(Wikipedia - ツンデレ (2008/10/15時点の記述))

- (7) 当初は「二人っきりの時は～」というかなり厳密な条件がついていたのだが、ツンツンとデレデレの落差が魅力になっているキャラ全般をくくる概念としてあまりにも便利なことばだったため、マニアたちに浸透する間にだんだんとしぼりがゆるくなっていき、現在では「外面ツン内面デレ」の状態ギャップ表現と、「ツンからデレ」への時間推移の表現をひっくるめた用語として使われている。

(『ツンデレ大全』, p.92「ツンデレ論」より)

「ツンツン」という要素と「デレデレ」という要素の、相反する二つの要素によって表されるのがツンデレであるといえる。

当初、ツンデレは、ゲームの登場人物の性格を表そうとして作り出された。「ツンツン」はゲームスタート時のキャラ性格（主人公・プレイヤーに対して何の感情も持っていない状態）であり、「デレデレ」はいわばゲームクリアのための目標条件（主人公・プレイヤーに恋愛感情を抱いている状態）である。

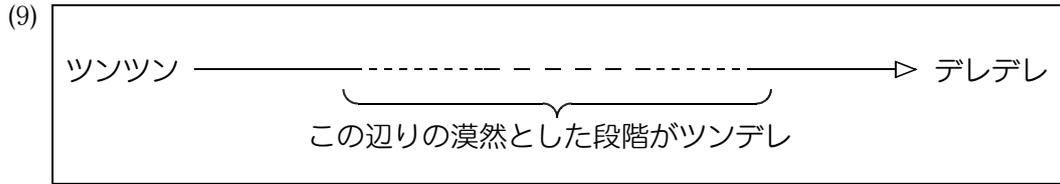
したがって、ゲームのストーリー全体としてみた場合、

- (8) 特別な感情《無》→《有》

という感情の転換がその登場人物に起こっている。時間の流れを基準とした「ギャップ」の存在を表しているのである。図にすると次ページ(9)のようになる。これが古典的なツンデレの図式である*5。(5)でいえば2に、(7)でいえば「時間推移」のほうに相当する。

この図式では、特定の時点・場面での性格・感情を取り出すことはできない。「ストーリー全体を俯瞰した結果、このキャラクターはツンデレだ」といった捉え方となる。

*5 本来なら、ここでゲームにおける具体例を挙げるべきであるが、公序良俗に反する可能性が非常に大きいので、本発表では割愛する。詳細は『ツンデレ大全』で各自参照されたい。



1.2. 解釈の拡大と定着

(7)の記述でも分かるように、ギャップ（落差）という点に特化した捉え方により、キャラクターへの適用範囲が飛躍的に拡大していく。「時間の流れ」という要素が捨象され、特定の時点・場面におけるギャップの存在のみが、ツンデレの主たる要素として注目されるようになった*6。その結果、

(10) 特別な感情《有》→それを表現できない

という、特別な感情の存在を前提とした捉え方が可能となった。この場合、感情という「内面」と、表現という「外面」とのギャップを持つことになる。つまり、デレデレな内面と、対極的なツンツンした表現とのギャップである。そして、ツンツン表現は特徴的な形式を伴って出現する。



*6 この変化は、おそらく、ゲームというメディアと、マンガ・小説・アニメというメディアの、媒体としての差が影響していると思われる。ゲームは、主人公＝プレイヤーであり、主人公の視点で描写されるが、マンガ等は、主人公≠読者であり、読者はいわば神の視点に立っている。ツンデレキャラを主人公視点で見るか、神視点でみるかは、描写の違い・解釈の違いに大きな影響を与えているはずである。

(11) 浦島「えっ・成瀬川も チョコくれるの？」

なる「なっ なんで私が あんたなんかにチョコやんなきゃいけないのよ!!!」

「大体受験生のくせに ちょっと みんなにチョコ もらったからって ヘラヘラしてんじゃないわよ！」

(赤松健『ラブひな』第7巻, 講談社, 2000年4月, p.111)



(12) ヒカリ「あ… おはよう」

トウジ「なんや おまえ なんで そんなトコ 隠れとんのや」

ヒカリ「べつに… 委員長として ちょっと気になったから…」

(貞本義行『新世紀エヴァンゲリオン』第6巻, 講談社, 2000年12月, p.94) *7

◆どこまで理解してもらえるか

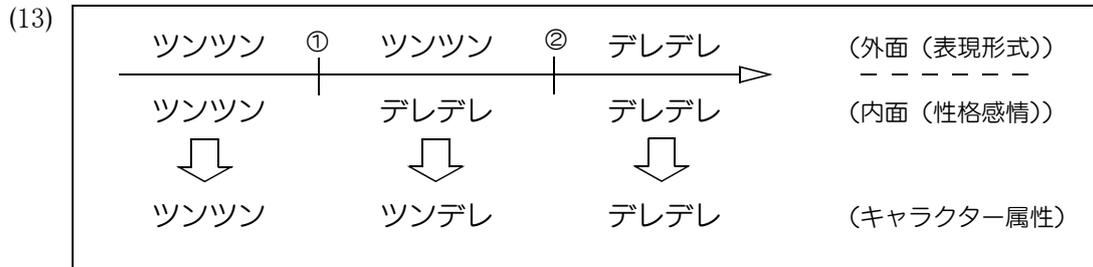
端的に言えば、ツンデレはいわゆる「素直になれない」キャラクターと言い切ってしまうこともできる。ツンデレと、素直でないこととの相違点を見つけることが非常に困難になってきている。概念規定を厳密に行わなければならない理由もここにある。

→微妙な差異は感じ取れる。ギャップ量の多寡が関わってくると思われるが、今後の課題。

*7 『ラブひな』や『エヴァンゲリオン』は、厳密に言うとツンデレという概念が発生する以前の作品であるが、状態ギャップの典型例であるので、取り上げている。

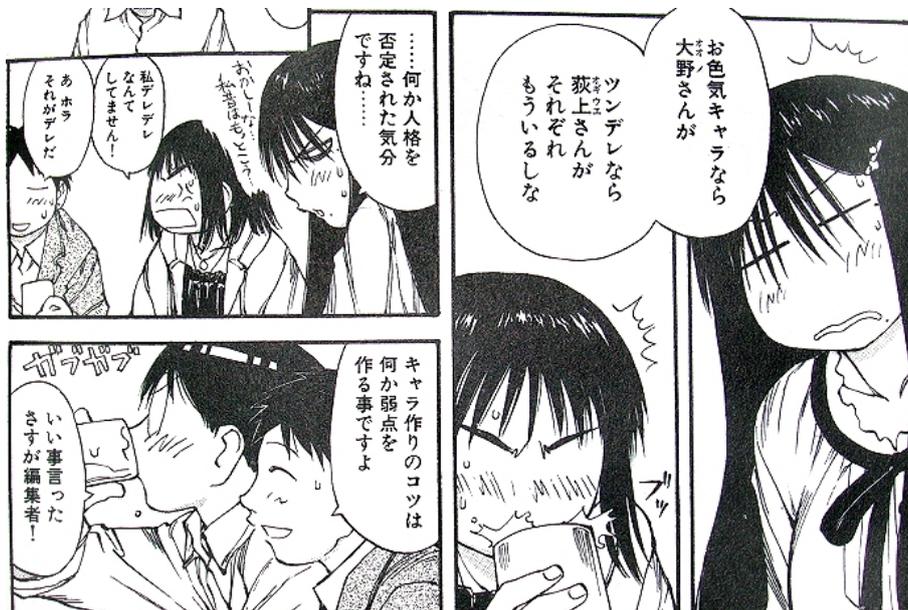
◆定式化の試み

(8)と(10)の二種類のギャップを組み合わせると、ツンデレという属性の位置付けがより明確になるのではないか。本発表では(13)のような形で、ツンデレキャラクターを規定してみたい。



◆解釈の多様性

例えば、デレデレ属性をある種の（ゲーム的な）到達目標とすると、上記の定式に従えば、ツンデレの時点で既に目標に到達していることになる。このことは、『げんしけん』の記述からも窺える。



(14) 斑目「お色気キャラなら大野さんが ツンデレなら荻上さんが それぞれもういるしな」

大野「……何か人格を否定された気分ですね……」

荻上「私デレデレなんてしてません！」

笹原「あ ホラ それがデレだ」

(木尾士目『げんしけん』第9巻, 講談社, 2006年12月, p.178)

→これは、ツンデレの時点で既にデレデレであることを明確に指摘している。ストーリー展開として、ゴールのさらに先(②の境界を越えること)を描写するかどうかは、もはやツンデレ属性の付与に關与的ではないといえるだろう。

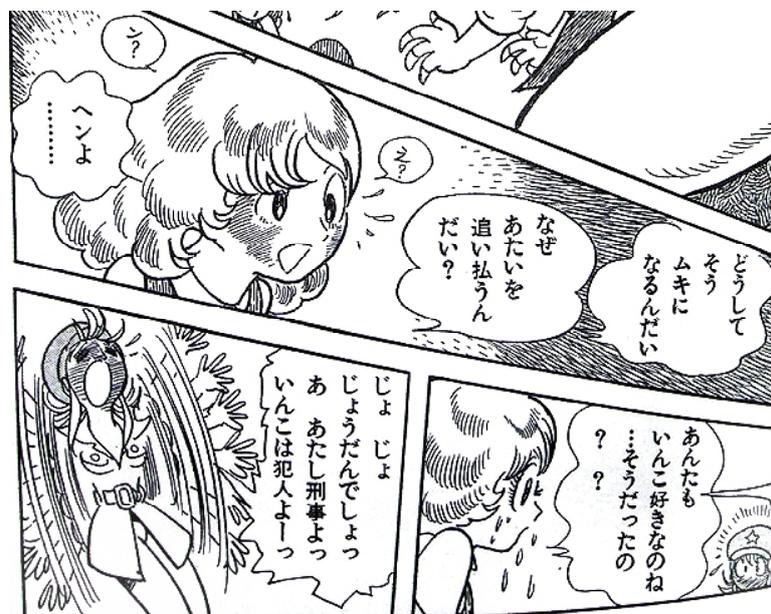
1.3. ツンデレ概念の遡及

現在のツンデレ概念の定着に伴い、ツンデレ以前(2004~2005年以前)の作品においても、キャラクターにツンデレ属性を当てはめる動きが出てくる。

『新世紀エヴァンゲリオン』の登場人物、惣流・アスカ・ラングレーがその典型例といえる。『エヴァ』発表時^{*8}はツンデレという概念はもちろんなかったものの、現在ではツンデレ属性を持つ典型的キャラクターとして扱われている。

→鮎川まどか(まつもと泉『きまぐれオレンジ☆ロード』, 集英社, 1984~1987年)、管理人さん(本名・音無響子、高橋留美子『めぞん一刻』, 小学館, 1980~1987年)等、遡及してツンデレ認定されるキャラクターは数多い。

しかし、遡っていけばきりがなく、例えば、



*8 ここではブームのさきがけとなったテレビアニメ版(1995~1996年放映)を指す。

(15) モズク「どうして そうムキになるんだい なぜ あたいを追い払うんだい？
ヘンよ……………」

「あんたも いんこ好きなのね …そうだったの？？」

万里子「じょ じょ じょうだんでしょっ あ あたし刑事よっ いんこは犯人よ
ーっ」

（手塚治虫『七色いんこ』講談社全集版第6巻，1994年11月，p.87（初出は1982年2月））

このような手塚作品にも、ツンデレとして解釈できるキャラクターが登場する。

しかし、先に議論したように、非常にアバウトな概念で、かつ多様な解釈が可能なため、どんなキャラクターでもツンデレとして位置付けられてしまうという危険性も存在する。インターネット上では、『美味しんぼ』（雁屋哲原作・花咲アキラ作画，小学館，1983年～連載中）の海原雄山がツンデレである、といった記述が時折見られるが、拡大解釈の影響の一つといえるだろう^{*9}。

→碓ゲンドウ（『新世紀エヴァンゲリオン』）もその一人。

※何を持ってツンツンやデレデレと見なすのかが曖昧なのが、最大の原因といえる。『ツンデレ大全』で用いられているような、「ツン x%・デレ y%」といった段階性を持った尺度で表しているのかどうかも疑問として残る。（例えば、「ツン1%・デレ99%」でもツンデレと認めていいのかどうか。）

→「ギャップ」に加えて「萌え」という要素を導入すれば、キャラクターの限定は可能か（「萌え」の対象はそれなりに狭い）。そもそもツンデレは「ギャップ萌え」と捉えるのが基本であるので、このような方向性で限定・規定していく必要があるだろう。

2. ツンデレ属性と言語表現

◆言語表現との関わり

定式に従い、“表現がツンツン”・“内面がデレデレ”をツンデレ属性と位置付けることにする。となると、表現自体はツンツンした、(16)のようなものということになる。

*9 西田(2008)発表時の質疑応答において、大抵の近代文学作品には、ツンデレとして解釈できるキャラクターが登場するし、いわゆる遊女も典型的（古典的）ツンデレではないか、と金水敏氏のコメントがあった。

(16) ツンツン：敵対的、つれない、素っ気ない、罵倒的

しかし、(16)のままでは内面ツンツンとの区別がつかない。よって、何らかの差異をツンツン表現に与える必要がある。ツンツン表現に、デレデレ内面がどのような影響を与えるのか、結果としてどのような表現に変化するかを見るのが、言語表現分析としてのポイントとなる。あるいは、役割語と同様に、どんな表現を選択するとツンデレ属性を想起させることができるかを考えていく。

◆七つの特徴

さまざまなツンデレキャラクターの言葉づかいを踏まえると、ツンデレ属性と結びつく言語表現には以下のようなものが挙げられる。

- (17) 発話頭のつかえ
- (18) 接続助詞「から」による言いさし
- (19) 終助詞「ね」「よ」「よね」
- (20) 「～てあげる」「～もいい」
- (21) 述語をとりたてる「だけ」
- (22) 発話末の強調
- (23) 副詞・その他

次節では、これらの諸表現が何故ツンデレ表現たりうるのかを検討する。

◆補足

ここで注意しておかなければならないのは、

- (24)a ツンデレはツンデレ表現を必ず使うわけではない
- b ツンデレ表現を使うキャラクターがツンデレであるとは限らない

この二点である。ツンデレとされるキャラクターが常にツンデレ表現を使用するわけではない。その点は西田(2008)でも「ツンデレ表現は常用性がない」と指摘されている^{*10}。

*10 おそらく、ツンデレ表現を全く使用しないツンデレキャラクターが、「クーデレ」(クールなデレデレ)としてカテゴライズされているのではないと思われる。

3. ツンデレ表現分析 ―ケーススタディー―

3.1. つっかえ

(25) あ、あ、あんたの前でしか 着るつもりないんだからね！ は、恥ずかしいけど
ちゃ、ちゃんと見ときなさい…

（釘宮(2008b) 読み札「あ」）

(26) べ、別に、あんたのことなんか何とも思っていないんだからねっ！！ (= (1))

(27) ぐ、偶然よ、偶然。たまたま帰り道が同じだけなんだから！ (= (2))

つっかえがツンデレ属性を発露させる要因の一つであることは疑いようがない。事実、釘宮(2007,2008a,2008b)等に見られるツンデレキャラクターはつっかえることが非常に多い。ツンデレのステータスとして、つっかえは確立されていると見ていいだろう。

では何故、つっかえがツンデレ属性と結びつくのか。ごく単純に考えると、

(28) ギャップの存在 → 心の動揺 → つっかえる

このように捉えられるだろう。しかし、つっかえがツンデレに特化した役割語的表現であることの理由付けが少し薄いように感じられる。

本節では次のように考える。まず、定延(2005)の記述を見てみよう。

(29) 「とぎれ型・語頭戻り方式は、「自分がいま発言することばに集中していてつっかえてしまい（とぎれ型）、そのことばを初めから言い直す（語頭戻り方式）」ことだと考えることができる。驚いてモノの名を叫ぶ場合や、苦しみながらモノの名を告げる場合はこれにあたる」
（定延(2005), p.62）

つっかえは、何らかの《集中》行動によって発生すると考えられる。

(30) ギャップの存在 → 内面を隠す → 外面を繕う → 表現段階でつっかえる
《集中》 《集中》

→(30)のように捉えると、内面と外面の自己矛盾が含意され、内面の存在が予見でき、ツンデレとしてのギャップ感が的確に位置付けられる。

◇問題点／課題

- ・どこでつかえるのがツンデレ属性っぽいのか。
- ・つかえることができる形式に制限はあるか。
- ・つかえの意味、機能の精緻化

3.2. 「から」による言いさし

(31) し、心配なんてしてないんだからね！ (釘宮(2007) 読み札「そ」)

(32) 「その……遊園地のチケット、余ってるんだけど、今度よかったらいっしょに……ど、どうかな？」

「べ、別にあんたのことが好きとかそういうことじゃないんだから。チケットがもったいないから…そう、そうよ、それだけよ…ね……、観覧車一緒に…乗ってくれる？」

(釘宮(2008a) 小鳥美帆)

「から」を用いた言いさし表現もまた、ツンデレ属性を想起させる代表的なものの一つである。西田(2009予定)でもツンデレ属性と言いさし「から」の関係を綿密に分析している。釘宮(2007,2008a,2008b)で用いられた、言いさしの「から」を調査してみたところ、次のような結果となった。

(33)	「から」(「のだから」)
釘宮(2007)	17 (11)
釘宮(2008a)	73 (50)
釘宮(2008b)	21 (19)

特筆すべきは、「のだから」(「のだ」+「から」)による言いさしの割合の高さである。(31)(32)でも「のだから」による言いさしが用いられている。

野田(1995)で、「のだから」は、“聞き手が知っているはずの事態を十分に認識させる”といった機能を有していると指摘している。

(34) 「「のだから」の文の話し手は、相手(ときには話し手自身)が前件の事態を知ってはいるはずだが後件の判断に至るほど十分には認識していないとみなし、十分

認識させるために前件の事態を改めて示している」

（野田(1995), pp.242-243）

本来的な機能として考えるならば、「心配していない」こと等を相手知っているはずであるが、あえて「のだから」を付加して明示していると捉えられる。しかし、ツンデレキャラにとって「心配していない」ことは、内面の感情ではない。にもかかわらず、「のだから」を用いてしまうのは、“内面を隠す”行動の現れであるためと考えられる。

相手知っているはずのことは実はウソである、というギャップを表すために選択されるのではないか。「のだから」の示す確定性の大きさが、逆に本当の内面「心配している」ことの存在の大きさを含意しているといえる^{*11}。

◇問題点／課題

・脚注11参照。

3.3. 終助詞

(35) す、好きでこんな格好してるわけじゃないんだからね… あんたの前だけよ…
もう…バカ… (釘宮(2007) 読み札「す」)

(36) 「まったくなにやってんの！ 廊下なんか走ったりして、ふざけてるから壁に激突するんでしょう、バカ！！ 少しは他の人のことを考えなさいよね！」

「もう、いつも心配ばかりかけないでよね。あんたが怪我すると私が面倒見なきゃいけないんじゃない。だから注意してるんだからね…気を付けなさいよ…困るじゃない…だ、だって好きな人が怪我するなんて…」

(釘宮(2008a) 十束鈴果)

ツンデレ表現には、「ね」等の終助詞使用が散見される。数はそれほど多くない。

*11 ただし、日本語記述文法研究会(編)(2008)では、「のだから」を、

(a)「聞き手が十分には認識していないと話し手がみなしている事態を従属節に示し、認識させようとするとき用いられる」(p.132)

と記述し、野田(1995)での分析と対照的な結論となっている。また、「のだから」の言いさし（終助詞的用法）では話し手の不満が表される、とも述べている。「のだから」の本質がまだ明確にはなっていないといえるので、本発表での議論についても検討の余地がある。

(37)	「ね」*12
釘宮(2007)	11
釘宮(2008a)	40

まだ、検討課題であるが、終助詞使用がツンデレ属性を想起させうる要素であるかは、微妙なところである。終助詞が付加されていなくても、(例えば言いさしの「から」だけでも) ツンデレ属性の発露は可能なのではないか。

もし、終助詞がツンデレ表現として機能していないとすると、

- (38) 本質的意味そのままの働き
- (39) 女性属性を強めるための働き

このいずれかを担っている可能性も指摘できるかもしれない。

◇問題点／課題

- ・内省判断だけで、客観的な証拠が何もないので、何とも言えない。実例調査必須。

3.4. 「～てあげる」「～てもいい」

- (40) ついでだからあんたも誘ってあげるわ (釘宮(2007) 読み札「つ」)
- (41) 「あ～～っ、アンタなんでまた来てるのよっ、ここには来ないでっていったでしょ。と、とにかく、それ飲んだらすぐ帰ってよね」
「この格好見られるの、恥ずかしいんだから……。で、でも、どうしてもって言うなら、もう一回くらいなら来てもいいわよ……」
(釘宮(2008a) アンジェラ鈴木)
- (42) そんなに言うなら…花火大会 い、い、一緒に行ってあげてもいいわよ? か、勘違いしないでよ! ひ、暇だっただけだよ! ?
(釘宮(2008b) 読み札「そ」)

*12 ツンデレと解釈できる発話に現れた「ね」のみをカウントした。また、「わね」「よね」の「ね」もカウントしている。

授受表現「～てあげる」や、許容表現「～でもいい」もまた、ツンデレ表現として位置付けられるだろう。さらには、二つの表現を組み合わせた「～てあげてもいい」も、ツンデレ属性を想起させるのに十分な力を持っている。

「～てあげる」は恩恵を与える側の立場が話し手となる。「～でもいい」もまた、行動を許容する側が話し手になる。いずれも話し手の立場のほうが優位（上）であることを示している。これらの表現を用いることで、ツンデレキャラクターに内在するギャップ、つまり弱点の存在を隠蔽しようとしている意図が含意される。

(43) ギャップの存在 → それは弱点 → 相手に指摘されたら困る → 指摘させないために自分が心理的に上に立つ → 「～てあげる」 / 「～でもいい」

また、相手より上に立つことを意識したツンデレ表現には、人称表現「あんた」等も類例として挙げられよう。

(44) 「バイト先のかわいい女の子に振られたんだって？ ばっかみたい。写真見たけど
あんた、そんな子と釣り合うと思ってるの？」

「ま、まあ、あんたも釣り合いってのを考えてみるのね。あんたと付き合えるやつなんて…た、たとえば、あたしとか……もう！ 知らない！」

（釘宮(2008a) 辰見萌）

◇問題点／課題

- ・まだ思いつきの段階なので、分析不十分。

3.5. 「だけ」

(45) 「あ、あのね…あんた明日何か用事ある？ ……あんたどうせ暇そうだし一緒にプール行ってあげてもいいんだけど」

「か、勘違いしないでよ。暇そうなのがあんたしかいなかったから、しょうがなく誘っただけなんだからね！ 折角だから私の水着姿をあんたに見せてあげるって言ってるのよ！ ラッキーと思いなさい！」

（釘宮(2008a) 清水みつば）

→述語をとりたてる「だけ」はツンデレ表現といえるか？ 調査する価値はありそう。

3.6. 発話末の強調

・促音「っ」の付加や、記号「！」の付加が多い。

→何故？

3.7. 副詞／その他

◆「別に」

ツンデレ表現の代表例の一つともいえるものだが、次の表に見るとおり、数は多くない。

(46)	「べつに」
釘宮(2007)	1
釘宮(2008a)	18
釘宮(2008b)	2

→もちろん、一般的なコーパスと比較しての使用頻度を考慮しなければならないが。

◆「たまたま／偶然」

◆「勘違いしないで」

4. 今後の課題

- ・ツンデレ概念の精緻化
- ・役割語との関連 →ツンデレ表現は役割語なのだろうか (cf. 西田(2008))
- ・表現の分析 →表現の種類を豊富にして意味があるかどうか
- ・資料の収集と整理 →まとまった形で利用できるのは釘宮(2007,2008a,2008b)のみ

参考文献

- 上野智子・定延利之・佐藤和之・野田春美(編)(2005) 『ケーススタディ日本語のバラエティ』 おうふう.
- 金水 敏(2000) 「役割語探求の提案」, 佐藤喜代治(編)『国語論究第8集 国語史の新視点』, pp.311-351, 明治書院.
- 金水 敏(2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店.
- 金水 敏(編)(2007) 『役割語研究の地平』 くろしお出版.
- 金水 敏(2008) 「役割語と日本語史」, 金水・乾・渋谷『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』, pp.205-236, 岩波書店.
- 定延利之(2005) 『ささやく恋人、りきむりポーター』 岩波書店.
- 定延利之・中川明子(2006) 「非流ちょう性への言語学的アプローチ —発音の延伸、とぎれを中心に—」, 串田・定延・伝(編)『シリーズ文と発話1 活動としての文と発話』, pp.209-228, ひつじ書房.
- 定延利之(2007) 「キャラ助詞が現れる環境」, 金水敏(編)『役割語研究の地平』, pp.27-48, くろしお出版.
- 白川博之(1991) 「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要第二部』 39, pp.249-256, 広島大学.
- 白川博之(1995) 「理由を表さない「カラ」」, 仁田義雄(編)『複文の研究(上)』, pp.189-219, くろしお出版.
- 西田隆政(2008) 「役割語としてのツンデレ表現 —「役割表現」研究の可能性—」, 土曜ことばの会(2008/10/11)発表レジュメ.
- 西田隆政(2009予定) 「ツンデレ表現の待遇性 —接続助詞カラによる「言いさし」の表現を中心に—」, 『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』 45, 甲南女子大学.
- 日本語記述文法研究会(編)(2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』 くろしお出版.
- 野田春美(1995) 「「のだから」の特異性」, 仁田義雄(編)『複文の研究(上)』, pp.221-245, くろしお出版.
- 釘宮理恵(2007) 「ツンデレカルタ」株式会社 DEARS.
- 釘宮理恵(2008a) 「ツンデレ百人一首」株式会社 DEARS.
- 釘宮理恵(2008b) 「ツンデレカルタ2008 日本の夏!ツンデレの夏!」株式会社 DEARS.
- 可愛零(編)(2005) 『ツンデレ大全 完全保存版 僕たちの大好きなツンデレキャラが大集合!!』 インフォレスト株式会社.

参考webサイト

ツンデレとは - はてなキーワード

<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%C4%A5F3%A5C7%A5EC>

ツンデレ - Wikipedia

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%84%E3%83%B3%E3%83%87%E3%83%AC>

ツンデレ初心者の方へ

<http://www013.upp.so-net.ne.jp/gon/tundere/introduction.html>

もみあげチャ〜シュ〜:語尾を「〜だからね!」をつけるとツンデレっぽく聞こえる件

<http://blog.livedoor.jp/michaelsan/archives/50262658.html>

Appendix: せっかくスキャンしたので……



(47) 翠星石「でも その服だと いつものチビ人間より ちょっとだけ…」

「ま…ましに見えない事もないですよ」

(PEACH PIT 『ローゼンメイデン』 第5巻, 幻冬舎, 2005年8月, p.70)



(48) 百舌谷「一般によく誤解されている事ですが 私達ツンデレは他人に対する行為
や愛情をそれとは裏返しの攻撃的な行動で表してしまうため すべての感情
が普通の人間とは逆であると思われがちです」

「しかし ツンデレの症状が出て逆の感情表現になるのは他人に対する好意
だけで 喜怒哀楽の感情は他の普通の人間と何ら変わりなくあるんです」

(篠房六郎 『百舌谷さん逆上する』 第1巻, 講談社, 2008年6月, p.12)



(49)はじめ「この鎖がなくなったら 透華が少し遠くなっちゃうような気がするんだ」

透華 「で...でも 家では毎日外してるでしょう」

はじめ「いやあ」

「その時はいつも透華が横にいるんだよ...」

「ほら...ボクは透華付きのメイドだから...」

「たまに衣もあるけどね」

透華 「そっ...そう 衣!! もうすぐ私の試合だというのにどこに行ってしまったのかしらっ!! あの子っ」

(小林立『咲』第4巻, スクウェア・エニックス, 2008年7月, pp.13-14)